

エズラ記1-3章「エルサレム帰還」

捕囚後の歴史

1A クロスの布告 1

1B 主の霊の奮い立ち 1-4

2B エルサレム帰還 5-11

2A 帰還民 2

1B 系図 1-67

2B ささげ物 68-70

3A 神殿の礎 3

1B 仮庵の祭り 1-7

2B 主への賛美 8-13

本文

捕囚後の歴史

エズラ記1章を開いてください。今日は、1章から3章までを学んでみたいと思います。私たちはついに、旧約時代のイスラエルの歴史の最後に入りました。列王記第二、歴代誌第二に書いてありました、バビロン捕囚からイスラエルの民が帰還した後の話であります。エズラ記、ネヘミヤ記、そしてエステル記が捕囚後の歴史を取り扱っています。預言書では、ハガイ書、ゼカリヤ書、そしてマラキ書がこの時期に預言されました。

この三冊、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記について大まかに説明します。エズラ記とネヘミヤ記は、バビロンに捕え移されていた残りの民がエルサレムに帰還する歴史を記録しています。帰還は、主に三度ありました。バビロン捕囚が605年、597年、586年と三段階に渡ってあったように、帰還も三段階あります。初めに、586年、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアが指揮して帰還します。この時に神殿を再建させました。エズラ記1章から6章までに書いてあります。二回目は、祭司であり律法学者エズラが率いる帰還団です。紀元前458年に帰還し、神殿をさらに補強し、そして民に律法を教えることが目的でした。エズラ記7章から10章までに書いてあります。そして、紀元前445年にネヘミヤが率いる帰還団が行きます。ネヘミヤによって城壁の再建が完成します。そしてエステル記は、帰還民ではなく、帰還しなかったユダヤ人について書いてあります。ペルシヤのシュシャンを始めとする話です。これは、エズラ記1-6章と7-10章の間に起こっています。つまり、神殿がエルサレムで建てられた後、そしてエズラがエルサレムに帰還する前に起こった出来事です。

エズラ記またネヘミヤ記の主題は、残された民の復興です。神殿を再建して、城壁も再建して、エルサレムを回復します。ご自分の罪によって神の約束された地から引き抜かれた民に、主が再び新たに、ご自身を礼拝する生活を与えてくださいます。神の民の建て直しを見ます。そして、神

の民の建て直しは、すなわちキリストの教会に建て直しでもあり、個々のキリスト者の建て直しでもあります。

1A クロスの布告 1

1B 主の霊の奮い立ち 1-4

1:1 ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。1:2 「ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。1:3 あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。1:4 残る者はみな、その者を援助するようにせよ。どこに寄留しているにしても、その所から、その土地の人々が、エルサレムにある神の宮のために進んでささげるささげ物のほか、銀、金、財貨、家畜をもって援助せよ。』」

午前礼拝で学んだ、クロス王の発令です。ここでの特徴は、エレミヤの預言が実現したというものです。もう一つの特徴は、主がクロスの霊を奮い立たせた、ということです。どのように主がクロスの霊を奮い立たせたのかについて、しばしば言われているのが、ダニエルがクロスにエレミヤの預言とイザヤの預言を見せたのではないかと言われます。エレミヤ書 25 章、29 章の七十年間の預言を見せ、またイザヤ書 44 章、45 章のクロス王の預言を見せたのではないかとされています。ヨセフスは、著書「古代誌」の中でイザヤ書をクロスに見せて、彼の名が書かれているのを見たことを記しています。

どのような形でありこそすれ、神殿の再建は主ご自身から始まった、ということが大事です。主が人の心を奮い立たせることによって、その人が立ち上がり、神の御心を行うことによって、主はご自分の計画を実現してくださいます。「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。」(詩篇 127:1)とあるように、神の働きのためには、神によって「奮い立たせられた」人々の存在があります。神の主権的な働きによります。使徒パウロはこう言っています。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。(ピリピ 2:13)」(参照:「牧師の書齋」エズラ記の瞑想 1. 霊を、心を「奮い立たせる主」)

2B エルサレム帰還 5-11

1:5 そこで、ユダとベニヤミンの一族のかしらたち、祭司たち、レビ人たち、すなわち、神にその霊を奮い立たされた者はみな、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行こうと立ち上がった。1:6 彼らの回りの人々はみな、銀の器具、金、財貨、家畜、えりすぐりの品々、そのほか進んでささげるあらゆるささげ物をもって彼らを力づけた。

主の霊によって奮い立ったクロスの発令に対して、同じように神の霊によって奮い立たされた者

たちがいました。ユダのベニヤミンの一族のかしらたち、そして神殿で奉仕する祭司やレビ人たちはです。そして、次に大事な動詞が出てきます。「立ち上がった」であります。立ち上がるには、時が満ちる必要があります。バビロン捕囚生活の中で、彼らはモーセの律法を読み、主を慕い求める心が強くなっていったことでしょう。この積み重ねがあり、主が御霊で人の心を動かす時に、これまで行動に移さなかったことを、行動に移すべく立ち上がります。

そして次に大事なのは、「彼らの周りの人々」です。奮い立つ人々の周りに、その働きを「カづける」人々がいました。支援する人々であります。そしてカづける働きは、「進んでささげる」という自発的なものであります。

1:7 クロス王は、ネブカデネザルがエルサレムから持って来て、自分の神々の宮に置いていた主の宮の用具を運び出した。1:8 すなわち、ペルシヤの王クロスは宝庫係ミテレダテに命じてこれを取り出し、その数を調べさせ、それをユダの君主シェシュバツアルに渡した。1:9 その数は次のとおりであった。金の皿三十、銀の皿一千、香炉二十九、1:10 金の鉢三十、二級品の銀の鉢四百十、その他の用具一千。1:11 金、銀の用具は全部で五千四百あった。捕囚の民がバビロンからエルサレムに連れて来られたとき、シェシュバツアルはこれらの物をみないっしょに携えて上った。

エルサレムの神殿にあった金銀の用具は、ネブカデネザルが持ち去っていました。「主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手へ渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。(ダニエル 1:2)」ネブカデネザルの、バビロンの神の宮の宝物倉に入れました。そして、バビロンの最後の王ベルシャツアルが、そこから金銀の器を持ってきて、それに酒を注いで、自分たちの神々を賛美しました。そこに、人の手の指が塗り壁に現れて文字を書いたのです。その宝物倉は今、クロスのものになっています。そこからエルサレムの神殿で使うものを取り出しました。

そして「ユダの君主シェシュバツアル」とあります。これは 2 章 2 節に出てくるユダヤ人の総督ゼルバベルのことです。ゼルバベルは、ユダの王エコヌヤの孫です(1歴代 3:19)。ですから、彼はユダ王国があれば王位に着いて良い人です。けれども、今はペルシヤの支配の中にありますから、王にはなれません。けれども、クロスは彼をユダヤ人の長、総督にしました。

2A 帰還民 2

1B 系図 1-67

2:1 バビロンの王ネブカデネザルがバビロンに引いて行った捕囚の民で、その捕囚の身から解かれて上り、エルサレムとユダに戻り、めいめい自分の町に戻ったこの州の人々は次のとおりである。2:2a ゼルバベルといっしょに帰って来た者は、ヨシュア、ネヘミヤ、セラヤ、レエラヤ、モルデカイ、ビルシャン、ミスパル、ビグワイ、レフム、バアナ。

2章は、帰還民の系図であります。歴代誌第一もそうでしたが、彼らが確かにイスラエルの民で

あり、またアロン系の祭司またレビ人であるかどうか、細心の注意を払って記録していました。この記録から一気に、新約聖書の初め、マタイ1章のイエス・キリストの系図があり、またマリヤに至る系図がルカ 3 章にあります。これは、私たちの考える系図以上の意味があり、神が蛇に対して、「女の子孫が蛇の子孫のかしらを打ち砕く」というメシヤ待望があります。そして、それがアブラハムの子孫へと受け継がれているので、その中に彼らがいるのかどうかの細かい審査があるので。そして、ここにゼルバベルの名がありますが、マタイ 1 章 12 節に、「バビロン移住の後、エコニヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ」とあります。このゾロバベルがゼルバベルのことです。

そしてゼルバベルの次に、「ヨシュア」がいます。彼は祭司の子で、大祭司となります。これから、この二人がコンビとなって、イスラエルの人々の指導者となります。預言者ゼカリヤは、政治的指導者ゼルバベルと宗教的指導者ヨシュアそれぞれに慰めと励ましの言葉をかけ、この二人が終わりの日には一つとなり、神殿を建てるという預言を行いました。「彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』(6:13)」つまり、王であり、かつ祭司であるメシヤです。この二人の証人が、一人の人、イエス・キリストを表していきます。

そして、合計十一人のかしらの名が記されていますが、同じ系図がネヘミヤ記 7 章 7 節にあります。そこには十二名がいます。おそらく、イスラエル十二部族の代表を表しているのでしょう。

2:2b イスラエルの民の人数は次のとおりである。

ここから 35 節まで、イスラエルの民の各氏族や家族の人数が記されています。そして、36 節から祭司の氏族と人数が、40 節からレビ人の氏族があります。レビ人には、歌うたいと門衛という、ダビデによって与えられた重要な任務があります。そして宮に仕えるしもべたちの氏族が 43 節から 54 節まで、そしてソロモンのしもべたちの子孫が 55 節から 58 節までにあります。

興味深いのは、59 節からです。2:59 次の人々は、テル・メラフ、テル・ハルシャ、ケルブ、アダン、イメルから引き揚げて来たが、自分たちの先祖の家系と血統がイスラエル人であったかどうかを、証明することができなかった。2:60 すなわち、デラヤ族、トビヤ族、ネコダ族、六百五十二名。2:61 祭司の子孫のうちでは、ホバヤ族、コツ族、バルジライ族。…このバルジライは、ギルアデ人バルジライの娘のひとりを妻にめとったので、その名をもって呼ばれていた。…2:62 これらの人々は、自分たちの系図書きを捜してみたが、見つからなかったため、彼らは祭司職を果たす資格がない者とされた。2:63 それで、総督は、ウリムとトンミムを使える祭司が起こるまでは最も聖なるものを食べてはならない、と命じた。

祭司の子孫でありながら、証明、家系の書面がなかったため奉仕に携わることができませんでした。これだけ厳密に、名が書き記されているかどうか非常に重要だったので。バビロン捕囚の

中で、なおのこと自分がイスラエルの契約に入っているのか、また祭司であれば、祭司の務めのために召されたものなのか、それが明白になっていなければいけませんでした。

したがって、同じようにイエス様は、弟子たちがその名が天に書き記されているかどうかを気にしておられました。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。(ルカ 10:20)」皆さんは、この世の中に生きていて、この世ではなく、天に自分の名が書き記されていることに確信を持っているでしょうか？イエス様はサルデスの教会にこう語られました。「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。(黙示 3:5)」

2013年6月の牧者会議で、チャック・スミスがこの箇所を、涙を持って解説していたのを思い出します。「いつの日か、私の名が、この宇宙の造り主、審判者の前で呼ばれる。自分のしたこと、自分の思ったことのすべてを知っておられる、聖なる神の前に立つことはどういうことなのかを思う。けれども、独りで立たなくてよいことを感謝している。こんな歌がある、『この罪ある者の弁明をするのは誰か。』暗闇の中で私は、この方が待っておられるのを見る。そしてやさしい声が答える。『わたしが弁明します。』」私は本当に嬉しい、御父の前で弁護してくださる、すばらしい方がおられる。義なるイエス・キリストが答えてくださる。私は、どうしようもない自分の義によって立つ必要がない。イエス・キリストの義によって、この方を信じることによって転嫁されている義によって立つことができる。」そして彼は、2013年10月3日に召天しました。彼の名は、確かに父なる神の御前でイエス様によって呼ばれていることでしょう。

2:64 全集団の合計は四万二千三百六十名であった。2:65 このほかに、彼らの男女の奴隷が七千三百三十七名いた。また彼らには男女の歌うたいが二百名いた。2:66 彼らの馬は七百三十六頭。彼らの螺馬は二百四十五頭。2:67 彼らのらくだは四百三十五頭。ろばは六千七百二十頭であった。

帰還者の合計人数 4万 2360人は、列挙されている者たちの人数を足した数よりさらに、1万 1千人多いそうです。その差は、ユダとベニヤミン以外の部族からのものであると考えられます。エフライムとマナセについては、歴代誌第一 9章 3節に、そして 2章 70節には「すべてのイスラエル人」とあります。そして 6章 17節には、いけにえがイスラエル人全体の罪のためとして、十二頭がささげられています。おそらく、この帰還の民がペルシヤ領土を歩いている時に、アッシリヤによって捕え移されたイスラエル十部族の者たちも加えられたのではないかと考えられます。新約時代には、ヤコブの手紙で十二部族に対して手紙を書いているので、しばしば言われる「失われた十部族」というのは間違っています。

2B ささげ物 68-70

2:68 一族のかしらのある者たちは、エルサレムにある主の宮に着いたとき、それをもとの所に建

てるために、神の宮のために自分から進んでささげ物をした。2:69 すなわち、彼らは自分たちに行き得ることとして工事の資金のために金六万一千ダリク、銀五千ミナ、祭司の長服百着をささげた。2:70 こうして、祭司、レビ人、民のある者たち、歌うたい、門衛、宮に仕えるしもべたちは、自分たちのもとの町々に住みつき、すべてのイスラエル人は、自分たちのもとの町々に住みついた。

ここ 2 章の強調点は、彼らが「自分たちのもとの町々に住みついた」ということです。1 節にも書いてありました。ようやくのこと、自分の留まるべきところに戻ってくることができました。これは、キリスト者に対して語られている、イエス様のメッセージであります。自分が本来いなければいけないところに、戻っていきます。そして、そこに留まります。「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。(ヨハネ 15:3)」何かをすることではありません。いや、何かをすることによって、むしろ、本来いなければいけなかったところから離れてしまっているかもしれません。自分が神の恵みの中で成長しているでしょうか？それとも、成長する努力を怠って、自分のあらゆる活動によって補完しようとしていなかったでしょうか？主が、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」

3A 神殿の礎 3

1B 仮庵の祭り 1-7

3:1 イスラエル人は自分たちの町々にいたが、第七の月が近づくと、民はいつせいにエルサレムに集まって来た。3:2 そこで、エホツァダクの子ヨシュアとその兄弟の祭司たち、またシェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちは、神の人モーセの律法に書かれているとおり、全焼のいけにえをささげるために、こぞってイスラエルの神の祭壇を築いた。3:3 彼らは回りの国々の民を恐れていたため、祭壇をもとの所に設けた。彼らはその上で主に全焼のいけにえ、すなわち、朝ごと夕ごとの全焼のいけにえをささげた。3:4 彼らは、書かれているとおりに仮庵の祭りを祝い、毎日の分として定められた数にしたがって、日々の全焼のいけにえをささげた。3:5 その後、常供の全焼のいけにえと、新月の祭りのいけにえと、主の例祭のすべての聖なるささげ物、それからめいめいが喜んで進んでささげるささげ物を主にささげた。

第七月というのは、神がイスラエルに定められた祭りで仮庵の祭りがあります。仮庵の祭りは、イスラエルの民がエジプトから出てきて、荒野の旅を経て、無事に約束の地に入ることできたことを記念する祭りです。ゼルバベルらがこの祭りを守ること、そしてネヘミヤ記でもネヘミヤまたエズラが仮庵の祭りを導くところを見ると、帰還の民はおそらく、自分たちの約束の地へ戻ってきたことを、荒野の旅をしたイスラエルの父祖たちになぞらえているのでしょう。

この章の大事なものは、「いつせいに」という言葉です。このような表現は新改訳のみであり、口語訳も新共同訳も、直訳「ひとりの人のように」を採用しています。彼らは、まるでひとりの人のように集まってきて、2 節にあるように「こぞって」祭壇を築きました。9 節には、「一致してたち」とあります。ここで私たちは、神の民の建て直しにおいて、さらに大事な要素を学びます。神の民が立てら

れる時に、主による奮い立ちが必要であることを一章で見ました。奮い立って、立ち上がった人々を力づけることも必要でした。それから、二章では、「住んでいたところに戻る」ということを学びました。自分がキリスト者として留まっているところに戻ります。そしてこの三章では、一つになる、ということなのです。

主の働きが著しいところには、御霊の一致があります。使徒の働きには、弟子たちが「みな心を合わせ(1:14)」祈っている姿を見ます。聖霊が降られた時も、みなが一つの所に集まっていたところで、それぞれが聖霊に満たされました。そして、救われる人々が加えられる時も、「毎日、心一つにして宮に集まり(2:46)」とあります。4章24節では、使徒たちが迫害を受けたことを聞いて、「心一つにして」、神に声を上げたところ、聖霊に満たされて、なおのこと大胆に御言葉を語りました。心一つにするところに、主の力が働くのです。したがって、私たちは聖霊に満たされるとか、クリスチャンとして霊的になるであるとか、まるで自分独りの素養が高まるかのように考えたら、大きな間違いです。だれが優れているのかという議論のない、互いを尊び、互いに仕える、そういう関係があるところに、聖霊の力強い業を受けることができるのです。

そして彼らは、祭壇を築きました。周りの民を恐れているとありますが、次回の学び、4章、またネヘミヤ記において周囲の住民による激しい反対に彼らは遭います。全く、ユダヤ人たちの礼拝が許されない、敵対的な雰囲気満ちていたのです。

そして大事なものは、「モーセの律法に書かれているとおりに」とあります。民数記29章に詳しく、八日間ささげのいえにえについての指示が、具体的に記されています。これらのおきてを、きちんと従っていました。彼らは、モーセの律法に書かれている通りにしようと決めていました。これまでしていなかった慣習であっても、ただ書いてあるということだけで行っていました。これが、彼らが神の民として建て直され、回復する力となりました。

このことも使徒行伝には、顕著に現れています。信徒たちは、「使徒たちの教えを堅く守り」とあります(2:42)。使徒たちの教えを学んだのではありません、堅く守ったのです。使徒の最後の書物、黙示録でも、「この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。(22:7)」とあります。ただ聞いて、その中身を知るだけでは不十分であり、その中に生きるのです。

3:6 彼らは第七の月の第一日から全焼のいけにえを主にささげ始めたが、主の神殿の礎はまだ据えられていなかった。3:7 彼らは石切り工や木工には金を与え、シドンとツロの人々には食べ物や飲み物や油を与えた。それはペルシヤの王クロスが与えた許可によって、レバノンから海路、ヤフォに杉材を運ぶためであった。

神殿を建てる準備を始めました。まずは礎からですが、石切り工や木工を雇いました。また、かつてソロモンが、ツロの王フラムと協定を結び、神殿の設計者をツロ出身の者から雇いましたが、同じようにシドンとツロの人々を雇いました。そして、レバノンからの杉材を、かつてと同じようにヤ

ツフォまでいかに運び、そこから陸路でエルサレムまで運んでいくようにさせました。

2B 主への賛美 8-13

3:8 彼らがエルサレムにある神の宮のところに着いた翌年の第二の月に、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子ヨシュアと、その他の兄弟たちの祭司とレビ人たち、および捕囚からエルサレムに帰って来たすべての人々は、主の宮の工事を指揮するために二十歳以上のレビ人を立てて工事を始めた。3:9 こうして、ユダヤ人ヨシュアと、その子、その兄弟たち、カデミエルと、その子たちは、一致して立ち、神の宮の工事をする者を指揮した。レビ人ヘナダデの一族と、その子、その兄弟たちもそうした。

礎の工事を始めるまでに時間がかかりました。その材料の調達に時間がかかったのでしょう。そして、その工事はレビ人が指揮します。工事という肉体的労働であっても、それは霊的な事柄に仕えている人々が監督しなければいけません。神の家には、あらゆる事柄に霊的な判断力が必要とされます。例えば、お茶を新来者の方に出すこと一つにしても、本人が主へ祈り、御言葉によって養われ、整えられている人が理想です。そうでなくても、霊的に成熟した人の指示や監督によって行わないといけません。

3:10 建築師たちが主の神殿の礎を据えたとき、イスラエルの王ダビデの規定によって主を賛美するために、祭服を着た祭司たちはラツパを持ち、アサフの子らのレビ人たちはシンバルを持って出て来た。3:11 そして、彼らは主を賛美し、感謝しながら、互いに、「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに。」と歌い合った。こうして、主の宮の礎が据えられたので、民はみな、主を賛美して大声で喜び叫んだ。

礎が完成しました。定礎式を行います。その時に賛美を捧げましたが、それが「ダビデの規定によって」行った、とあります。歴代誌第一で学んだ、ダビデが御霊によって導かれた定めた賛美と歌による礼拝です。彼らはモーセの律法だけでなく、ダビデの規定にしっかりとしがみついて、それで主への賛美を捧げました。これも、私たち教会が倣わなければいけないことです。私たちは神を礼拝しますが、神が規定した方法で礼拝しなければいけません。一般社会で規定されたもの、習慣化されたものが、そのまま教会で通用するとは限りません。いちいち、主がこのことについて何を語られているのか、私たちは尋ね求めなければいけないのです。

そして彼らは感謝して、歌い合っています。二手に別れて、歌い合ったのでしょう。これは、エレミヤ書の実現です。「主はこう仰せられる。「あなたがたが、『人間も家畜もいなくて廃墟となった。』』と言っているこの所、人間も住民も家畜もいなくて荒れすたれたユダの町々とエルサレムのちまたで、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、『万軍の主に感謝せよ。主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで。』』と言って、主の宮に感謝のいけにえを携えて来る人たちの声が再び聞こえる。それは、わたしがこの国の捕われ人を帰らせ、初めのようにするからである。」と主は仰せられる。(33:10-11)喜びが取り戻りました。

私たちクリスチャンは、とにかく、元気でなければいけない、喜んでいなければいけないと自分に強いています。苦しみにいるのに、喜んでいないとクリスチャンらしくないとするのです。そうすることによって、感謝や賛美さえも心からではなく、形式的になります。そうではありません、この帰還民は悔い改め、罪を悲しんで、そして主の御言葉に従っているのです、感謝と喜びが湧き上がったのです。

コロサイ書を開いてください。私たちは賛美します。けれども、一連のクリスチャンのすべきことを行なったから賛美の歌が歌えます。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(3:15-16)」キリストの平和が心を支配して、私たちが一つにされていること。これは先ほど話したとおりです。そして、感謝の心を持つこと。それから、キリストのみことばを豊かに住ませること。そして、みことばをもって知恵を尽くして互いに教えていること。また、互いに戒めることさえします。これらのことを行なって、初めて、「詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」ということができるのです。

3:12 しかし、祭司、レビ人、一族のかしらたちのうち、最初の宮を見たことのある多くの老人たちは、彼らの目の前でこの宮の基が据えられたとき、大声をあげて泣いた。一方、ほかの多くの人々は喜びにあふれて声を張り上げた。3:13 そのため、だれも喜びの叫び声と民の泣き声とを区別することができなかった。民が大声をあげて喜び叫んだので、その声は遠い所まで聞こえた。

興味深い現象が起こりました。最初の宮、つまりソロモンの建てた宮を見たことのある老人たちがいました。時は 535 年辺りですから、神殿が破壊されたのが 586 年ですから、まだ約五十年しかたっていないです。当時、二十歳の青年はまだ 70 歳です。ソロモン神殿の栄華に比べると、あまりにも劣っているのです。それで泣き声を出しました。けれども若い世代にとっては、ゼロからの出発ですから、礎ができたことでもとても嬉しいのです。この二つの声が入り混じっています。

これは、ある意味でどちらも正しいでしょう。神は私たちに懲らしめます。罪を犯して、それを捨てなければ、神は私たちに真の救いを与えるために懲らしめを与えられます。そして、自分の大切な人を失ったり、痛みを味わいます。けれども、その痛みの中で平安を得ます。平安を得ることができたので嬉しいですが、けれどもその痛みはまだ残っています。痛みがあるけれども、平和と義の実を結ばせています。ソロモンの栄華は取り戻すことができません、けれども、神の回復は始まっているのです。